

音楽科における思考のあり方

音楽科 鏡 千佳子

1. テーマ設定の理由

音楽科は平成24年度、本校の研究主題である「思考力を育む指導と評価～言語活動を通して～」を受けて、「よりよい音楽表現をするための言語活動とその評価～自分の思いを自分の言葉で伝えられる生徒を目指して～」という副題のもと、特に歌唱と創作の分野において、生徒自身の音楽表現を充実させるために有効な言語活動を取り入れた授業の実践を行ってきた。歌唱・創作、それぞれの授業でクラスを小グループに分けることで、一人一人の考えを吸い上げることができ、自分の意見や考えを述べる生徒の姿が見られたり、グループの発表を聴き合うことで、自分たちにはない工夫の仕方や留意点などを、自分たちで学ぶことができた。しかし、時間が少なかったこともあり、学んだことを活かしてさらによいものを創り上げるための十分な話し合いができたかという点必ずしもそうではなかったように思う。そこで25年度は、本校の研究主題である「課題を解決するための思考のあり方～よりよく思考するための手立ての工夫～」を受けて、昨年度の研究の課題も視野に入れ、「音楽科における思考のあり方」と設定した。

本校の研究主題にある「思考」とは、考える力であり、思考という働きは頭の中に蓄えられた内容をいろいろな関連づけ、新しい関係を作り出す働き、つまり関係をつける力（本研究紀要より）である。音楽科では課題解決という言葉は使わないが、課題はそれぞれの分野において存在する。例えば歌唱では、このように歌いたいという目標に対して、その目標を果たすための技能が自分自身に身に付けば課題は解決したと言える。自分が目指す姿、目標に近づくために既習事項から思考していくことのできる授業を考えていくことが必要である。そのために音楽科において、どのような思考の型や思考の手立てがより生徒の思考を働かせることができるのかを研究すべく、「音楽科における思考のあり方」と研究主題を設定し、昨年度に引き続き、創作分野と、新たに鑑賞分野において研究を進めた。

2. 課題を解決するための思考のあり方について

（1）課題設定のあり方について

音楽科では、教師側から示されたものから自分自身の解決すべき課題を見つけられるような課題設定を心がけている。歌唱分野で例を挙げると、「歌詞の内容や曲がつけられた背景を理解して、表現を工夫して歌おう」という課題に対して、「春を待ちこがれる気持ちとまだ来ない現実との表現を声の音色や強弱を工夫して歌う」など、生徒は自分にあったより具体的な課題を設定した。このように、一人一人が自分の課題を見つけることで課題解決の方法もわかりやすくなったのではないかと考える。

（2）思考の型について

平成25年度の研究で、鑑賞分野においては、歌舞伎における音楽の役割について、「比較する」「根拠を明らかにする」をもとに進めた。「比較する」は「いくつかの物事を、同じところ、違うところ、似たところなどに目をつけて比べ、性質や特徴を明らかにする」といった概念である。歌舞伎「勧進帳」の中のいくつかの場面を聴き比べることで、演奏の仕方によって単なるBGMだけに留まらず、場面の状況や登場人物の心情を表していることに気づき、歌舞伎における音楽

の役割を見出すことができるのではないかと考え選んだ。「根拠を明らかにする」は、「物事が存在するための理由となるものを明確にする」といった概念である。この場面ではどの楽器で、また何人で演奏されているかということや、声や楽器の音色、速度、強弱といったことからどのような状況を表しているのかが見えてくる。

創作分野においては「関連づける」「比較する」をもとに、箏で北陸新幹線の発車メロディを創った。「関連づける」は、ある事と他の事との間に内容的なつながりを見出す、という概念である。新幹線の発車メロディのイメージに合う箏の演奏方法を選び創作したり、友達の創った作品と「比較する」ことで新たなものが創り出されることを期待した。

(3) よりよく思考するための手立てについて

平成25年度の研究では、鑑賞・創作共に「比較する」という思考の型を用いた。同じ演目の中での比較をすることで場面の様子を把握したり、また自分の考えだけで留まるのではなく、他者からの学びを取り入れてさらに自分を高めるためには有効であると考えたからである。鑑賞では3つの場面を比較し、場面、音の特徴、なぜそう思ったかがわかりやすくなるようなワークシートを作成した。創作では、今回の授業内容に関してはイメージマップやデータチャートなどのいわゆる目に見える方法ではやりにくいため、小グループでの活動を多く取り入れ、その中で中間発表をし、意見交換をするなどして、よりよいものを創る時間をとった。またワークシートにも、他者からの学びを自分の課題解決にどう結びつけるか、という視点で書かせることで、自分以外の考えと比較して見たり聴いたりすることにつなげた。

3. 実践

(1) 鑑賞分野

題材名 歌舞伎に親しみ、その魅力を味わい伝えよう

題材の目標

- ・歌舞伎の特徴とその背景となる文化・歴史や他の芸術との関連に関心を持ち、鑑賞したり唄ったりする学習に主体的に取り組む。
- ・長唄の発声や言葉の特性を生かして唄う技能を身に付け、音楽表現を創意工夫する。
- ・音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽の特徴を物語や他の芸術と関連づけて理解し、魅力を味わい鑑賞する。

指導の計画（5時間）

- ・歌舞伎を知り、音楽と他の芸術との関連を理解する〔1時間〕
- ・長唄の特性や節回し、ふさわしい発声を理解し、真似て唄う〔1時間〕
- ・歌舞伎音楽の特質や雰囲気を感じながら、歌舞伎における音楽の役割を感じ取る〔1時間〕
- ・場面に応じた長唄の表現を工夫し、どのように唄うかについて思いや意図をもつ〔1時間〕
- ・歌舞伎の音楽の特徴を、物語などの他芸術と関連づけ、その魅力を理解しよさを味わって鑑賞する〔1時間〕

この鑑賞の授業では、様々な場面で思考の様子が見られるが、今回は歌舞伎における音楽の役割を感じ取る場面の生徒のワークシートの内容を取り上げる。

歌舞伎「勧進帳」のおおまかなあらすじを理解した上で、「詰め寄る場面」「弁慶が義経にわびる場面」「弁慶が義経一行を追いかける場面」の写真を見せ、音だけでどの場面を表しているのかを考えた。

また、今回使ったワークシートに次のような文面を付け加えた。

特徴は…音色・速度・旋律・テクスチャなどの音楽の要素に注意して聴いてみましょう。
 テクスチャとは、音や旋律の組み合わせ方、和音や和声、多声的な音楽、様々な音と音とのかかわり合いなど。

今までの鑑賞の授業では言葉だけで説明したり黒板に貼るなどしていたのだが、効果が薄かったのが今回ワークシートに記載した。テクスチャは生徒の中からいまひとつよくわからないという声が多かったことから、説明文も入れた。このことによって、なぜその場面だと思ったのか、音の特徴は何かを聴き取るポイントが絞れたように思う。

○生徒 A のワークシート

●3つの場面の音を聴いてみよう

	A	B	C
場面	わびる	追いかける	詰め寄り
なぜ？	テンポがゆっくりで、何だか寂しかった。 ろっくの中で唯一の唄が一人で、静かだけれど感情の強さが伝わってきたから。	だんだんテンポが速くなっていったので、走っていく様子を表しているように感じた。	唄も掛け声もたくさんの人の声がかきこえた。また、打楽器全てを使っていて、激しい感じがしたから。
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・唄 - 一人の声 ・楽器は三味線だけ - 一人 ・テンポはゆっくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・唄なし、掛け声 ・三味線以外 ・だんだんテンポが速くなっていった 	<ul style="list-style-type: none"> ・唄と掛け声 - 人数が多い ・全ての楽器 ・テンポの起伏、激しい

なぜその場面の音楽だと思ったのかを「なぜ」という項目に書かせた。A：弁慶が義経にわびる場面では、唄と三味線が少ない人数で演奏されていたこと、ゆっくり演奏されていたことから静かな場面ではないかと予想している。B：弁慶が義経一行を追いかける（飛び六方）の場面では、速度がだんだん速くなっていることから、走っている様子ではないかと予想している。C：詰め寄る場面では大人数での演奏、テンポの起伏が激しいことから、争っている場面ではないかと予想している。AとBは音色、速度から、Cでは音色、強弱、速度、テクスチャからどの場面かを予想している。どれも音の特徴をよく捉えている。

演じている場面によって使われる楽器を変えたり、唄を入れたり無くしたり（オペラでは歌が台詞になっているのでこんなことはできませんでしたが）、掛け声を入れたりすることにより舞台上で繰り広げられている世界観を盛り立て、演出し、観客を引き込んでいることが分かりました。



歌舞伎における音楽の役割についてまとめたワークシートの記述である。3つの場面の音楽の様子から、場面によって演奏する楽器を変えることで演出しているとまとめている。既習のオペラと比較して歌舞伎の音楽を捉えている。

○生徒Bのワークシート

●3つの場面の音を聴いてみよう

	A	B	C
場面	(詰め寄り <u>詫</u> びる。 義経一行を追いかける)	(詰め寄り 詫びる。 <u>義経一行を追いかける</u>)	(詰め寄り 詫びる。 義経一行を追いかける)
なぜ？	楽器が少なくて、唄が目立っている → 動きより台詞が大事 弁慶が何と何を言っているのか もの悲しい	楽器が多い。 華やかな場面？ 何か叩くようなリズムが速い 音？	人が多い 勢いがある 唄曲というよりは声(初め)。 音は高めが多い 人数
特徴	唄 速い。 ↑ 1オクターブくらい(音域) ↓ 伸ばしているときに 楽器 三味線のみ ↑ 1人。しんがり	唄 出し。 声のみ。 速い。 楽器 笛、旋律 大鼓 初めの方で音は大きかった → 速くかっている？ 何か叩く音。	唄 曲というよりは声(初め)。 音は高めが多い 人数 楽器 三味線が旋律 声より楽器の方が 音が多い。

なぜそう思ったかという理由に、B: 弁慶が義経一行を追いかける（飛び六方）場面で「何か叩くような音？」と書いてある。この場面では、黒御簾音楽が使われており、長唄で使われている楽器の音とは違う音に気付いている。また、生徒Aと同じく速度の変化から、さらには強弱からも走っていく様子ではないかと予想している。C: 詰め寄る場面では人が多いこと、また、音の高さにも着目し、詰め寄る場面ではないかと予想している。Aは音色、速度、テクスチャ、Bは音色、強弱、速度、リズム、テクスチャ、Cでは音色、旋律、強弱、速度、テクスチャからどの場面かを予想している。

「歌舞伎」という名前の通り 歌、舞踊、演技のみに注目してしまいがちだが、音楽にも注目することが必要である。歌とテンポとリズムはどのように関係しているのか、どのような楽器が使われているのかといったことから、情景が目に浮かぶように、歌舞伎における音楽は、状況や心情をより効果的に表す手段となっていると考える。



歌舞伎における音楽の役割についてまとめたワークシートの記述である。唄とテンポとリズム、また楽器の有無などから、状況や心情をより効果的に表す手段であるとまとめている。

(2) 創作分野

創作分野では、箏を用いて研究を行った。平成27年の春に開業する北陸新幹線の金沢駅の発車メロディを箏で創作するという試みを行った。箏を選んだ理由は、今の金沢駅の発車メロディも箏の音色で奏でられており、電子音の発車メロディに比べ印象が強く、また古都金沢らしい楽器だと感じたからである。また創作をする上で、ただ旋律を奏でるだけでなく、流し爪やピツィカート、合わせ爪、トレモロといった様々な奏法が発車メロディのイメージに結びつきやすいと考えたからである。

今回の創作において、箏の調弦は平調子を選んだ。授業の最初に金沢らしさとは何か、と生徒に問うと、「和」という答えが多かった。どの弦を選んで弾いても日本らしい「和」という感じが出る平調子にすることで、創作が苦手な生徒にも比較的簡単に創作ができると考えたからである。また鑑賞の実践では、演目の中での「比較」だったが、創作では自分の作品と他者の作品との「比較」を通して学びを深めた。

題材名 金沢をイメージし、北陸新幹線の発車メロディをつくろう

題材の目標

- ・ 箏の音色や奏法、平調子による旋律、構成に関心を持ち、箏の基礎的な奏法などを身に付けて演奏する学習や、それらを生かし音楽表現を工夫しながら発車メロディをつくる学習に主体的に取り組む。
- ・ 箏の音色、平調子による旋律、構成を知覚し、特質や雰囲気を感じながら、表現したいイメージを持ち、箏の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように発車メロディをつくるか思いや意図をもつ。
- ・ 平調子による旋律などの特徴を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて、発車メロディをつくる。

指導の計画（4時間）


- ・ 日本各地の駅の発車メロディを聴き、金沢らしい発車メロディを箏の様々な奏法を生かして創作する学習に主体的に取り組む。〔1時間〕

- ・ 平調子による旋律や構成の特徴を感じ取って音楽表現を工夫し，創作する。〔1 時間〕
- ・ 中間発表をし，音楽表現を深める。〔1 時間〕
- ・ 自分がつくった発車メロディを演奏する。〔1 時間〕

今回の創作の授業において思考の様子が見られるのは，お互いの工夫したところを学び会える中間発表の場と，全員の作品を鑑賞した場であると考えた。また，実際に箏を演奏しながら自分の作品を創り上げていく最中こそが思考している場面であるが，今回は「関連づける」と「比較する」という思考の型の研究を行ったので，この実践では，最後に全員の作品を鑑賞した後に，自分の工夫したところと友達の工夫したところを比較して，どのようなところが印象に残ったかを書いた。以下にそのワークシートの内容を取り上げる。

○生徒 A

列車の動きや乗客のことについてのものが多く，その点に注目するから，
 技法や音色も変わってくるということが分かった。また，自分と同じ所に
 注目していても使っている技法が違ったりしていろいろな考え方や
 捉え方があってとても面白かった。最後の音がしかり
 と締めの役割をしていて，自分もそうだが，しかりと
 音が出ないと締まりがなく見え残念だと思った。

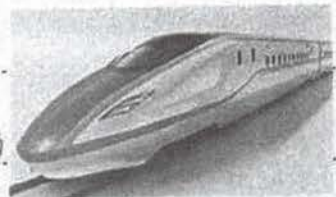


自分の作品と友達の作品とで，同じことを表現しようとしていても，選ぶ奏法が違うというおもしろさに気付いている。表現したいことは同じでも，奏法を変えることで印象がまた違ってくるということが他者との比較でよくわかる。



○生徒 B

クラスの中には、曲独特の優しさややさしさを表現するという工夫をするために
あえて低く使っていない人や、一つのフレーズを8小節用いて何度もくり返す
といった聴いた事がない弾き方をする人もいました。自分は曲をにぎやかにする
といった意味で音の切り換えを多くしたいが、金沢の和や
華やかさを上品に皆表していたのだからそういったことを表すため
にも流し低く利用しようと思いました。



自分では思いつかなかった奏法や作品に大きく影響を受けている。自分の工夫にさらにプラスして、金沢らしさを表すために新たな奏法を入れたという意欲も見られる。

○生徒 C

あがりづめを使うことで、曲に華やかさがでて、すてきな曲になること
が皆の演奏をきいてわかりました。私はながしづめを使うことで
曲になめらかさやスピード感をだすことができました。明るさを
だすために音の高い曲にしました。つめを使い
ずに演奏するというのが驚きだったけれど、やさしい
音になっていてすごいと思いました。



それぞれの奏法が生み出す特質や雰囲気をしっかりと知覚、感受している。また明るさを出すために、高い音を選んで創作したという工夫もしている。

○生徒 D

自分は、急き"を表現するために、トレモロを入れたけど、やっぱりあつて良かったなあ、と思いました。

友達に、有効的に合わせ爪を作ったことに指でひくことは考えもしなかったのに驚きました。又、"印象に残る"という

りも大切なポイントだ"と分かりました。



発車というイメージから、急いでほしいということを表すためにトレモロ奏法を入れて創作した生徒のものである。トレモロは人気が高く、何人もの生徒が取り入れていた。自分では思いつかなかった奏法や、同じ旋律を何度も繰り返すといった、印象に残る作品に目を付けている。

○生徒 E

間を大切にして作曲した。音の高さや数が上がっていくことでワクワクした気持ちを表現したのだが、合わせづめの技術がなかったことに後で気付いた。テンポや音の大きさなど、自分と違う視点から作曲していた人がいて、とてもおもしろかった。



「間」という日本独特なものに着目して創作している。まさに「和」の雰囲気を表すものである。箏で演奏をすることに大きな意味をもつ作品だと感じる。またワクワクした気持ちを表すのに、友達の作品から、合わせ爪も入れるとさらに良いものになると学んでいる。

4. 成果と今後の課題

今回の授業実践で、音楽科において思考は常に行われていることであるが、既習事項からどうつなげていくのかがポイントになるということが課題であると考えた。思考の型は、鑑賞分野においては、「比較する」「根拠を明らかにする」をもとに進めた。「比較する」は3つの場面を「比較する」ことで、演奏の仕方によって単なるBGMだけに留まらず、場面の状況や登場人物の心情を表していることに気づき、歌舞伎における音楽の役割を見出すことができた。また、この場面ではどの楽器が使われ、何人で演奏されているかということや、声や楽器の音色、速度、強弱といったことからどのような状況を表しているのかという「根拠を明らかにする」こともできた。

創作分野においては自分のイメージと箏の様々な奏法とを「関連づけ」て創作することができ、自分の作品と他者の作品を「比較する」ことで新たな発見があった。思考の手立てとして、鑑賞では聴くポイントを絞りワークシートに示したことで、生徒が明確に聴き取ることができ、また既習のオペラとも比較して歌舞伎の特徴を捉えることができた。創作では、様々な奏法と自分のイメージがどう結びつくのかを考え、自分が考える発車メロディを工夫して創ることができたが、それぞれの奏法がもたらす印象や、自分の表したいイメージを言葉や絵で表すことのできるワークシートの工夫が必要だった。今後は生徒がさらに思考しやすくなるワークシートを開発していくことが課題である。

